

[学会見聞記] 第10回アジア脳腫瘍学会に参加して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード: 作成者: 吉川, 陽文 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/34843

『学会見聞記』

第10回アジア脳腫瘍学会に参加して The 10th Annual Meeting of the Asian Society for Neuro-Oncology (ASNO 2013), Mumbai, 21st March - 24th March 2013

吉川 陽文

 金沢大学大学院医学系研究科
脳・脊髄機能制御学 博士課程3年

2013年3月21日から3月24日にかけてインドのムンバイで開催された第10回アジア脳腫瘍学会に参加させていただきました。ムンバイは、以前はボンベイと呼ばれていた都市でインドの首都ではありませんが、約1200万人とインドで最大の人口をほこる都市であります。当学会には脳神経外科医を始め、脳腫瘍研究者、脳腫瘍病理医、脳腫瘍放射線治療医など脳腫瘍の研究と治療に携わる医師・研究者がアジア圏より約500人集いました。行路は小松-成田-シンガポール-ムンバイの経路で、全行程で18時間かかりましたが、幸い飛行機が遅れることもなくほぼ定刻に到着しました。現地時間の深夜に到着し、空港からホテルまでの1時間はタクシーでの移動となりました。深夜にも関わらず交通量が多いうえ、車線を見失ったぎりぎりの車幅間隔での運転、また繁華街を少し離れた場所ではバラック小屋のような住居前の道路の石畳上で裸同然の格好で寝ている人もたくさんみられ、この場所でタクシーが止まってしまうたらどうなるのだろうという不安と緊張の中での移動でした。学会会場でもある宿泊先のタージマホールホテルは、インドでも有数の貴族であるタタ財閥が設立した世界でも最高級ホテルとして有名な場所であり、入り口でのセキュリティチェックの厳しさや内部設備のすばらしさに大変驚きました。翌日からの学会では、脳腫瘍基礎研究および臨床研究の最新知見が多く盛り込まれており、また発表への質疑応答も活発でした。特に今回は、アジア圏はもとより世界各地よりそれぞれの分野でのエキスパートの方が多く招かれており、最先端の情報とともに、いずれ私が受験する脳神経外科専門医試験のための知識としても非常にまとまった内容で勉強になりました。

私は、“Extensive angiographical arteriovenous shunting in perisylvian glioblastomas” という演題で2日目にポスター展示をしました。Glioblastoma (神経膠芽腫) は脳に発生する最も悪性の腫瘍で非常に血管に富む腫瘍です。脳血管撮影上の特徴として動脈と静脈の短絡がみられることが有名ですが、私は当科でこれまで治療を行った神経膠芽腫の症例を分析し、腫瘍のできる脳の部位によって動静脈短絡が顕在化することに優位差が生じることを発表しました。今回はポスター展示のみであ

ったため英語での発表はありませんでしたが、資料を英文に直す際に自分の英語力のなさを痛感し、学会中に他の人の発表や質疑応答を理解するうえでも英語の重要性を再認識させられました。

観光については、事前情報で治安があまりよくないとのことだったので夜は出歩くことはありませんでした。昼も高温で日差しが強く散策にはよい気候ではなかったもので、あまり遠くの場所へは行きませんでした。唯一、ホテル前のインド門から出る船で1時間揺られてエレファンタ島という世界遺産の石窟寺院がある島へ赴きました。そこでは6世紀頃に岩肌に掘られた厳かな彫刻を見学し大変印象に残っています。インドといえますと食事や飲水で体調を崩すことが多いと聞いていましたが期間中は飲水に気をつけ、ホテルでの食事が多く、外で食べる際もガイドブックに掲載されているような店での食事が中心で幸い体調を崩すことはありませんでした。1日3食カレーの日もありましたが、味付けは日本人の口にも合って満足できるものでした。インドでの通貨はRs (ルピー) が用いられ、私が訪れた際は1Rs=約2円の換算率でした。バナナ一房が5Rsなど日本と比べてかなり物価が安いと感じましたが、外国人が多数訪れるような飲食店やホテルでは日本と同程度のところもありました。帰路はムンバイ-成田の直通便で約8時間程度と飛行時間も短く、成田に着いた際には無事日本に帰ってきた安堵感がありました。日本の外に出て日本の良さを再認識できました。

最後にこのような貴重な学会への参加を快く承諾くださった当教室の濱田教授をはじめ医局員の皆様から感謝を申し上げます。

